

第10週(3月4日～3月10日)トピックス:<麻しん>

令和6年3月1日に、大阪府が公表した麻しん患者と同一の航空機に搭乗していた方が麻しんを発症した事例が、全国で複数報告されています。本市においても3月12日に、令和元年以来5年ぶりとなる患者が発生しており(3月13日広報発表、下記URL参照、全数把握感染症の報告状況は次週掲載)、今後の感染の拡大に注意が必要です。

麻しんの全国における過去の推移を見ると、平成19年及び20年に、予防接種法上、麻しんワクチンの接種を1回しか受けていない、10～20代を中心に大きな流行がみられましたが、平成20年から5年間、中学1年相当、高校3年相当の年代に2回目の麻しんワクチン接種を受ける機会を設けたことなどにより、平成21年以降患者数は激減し、平成27年には過去最低の35例まで減少しました。

これにより、WHO西太平洋地域事務局は、平成27年3月27日に、日本を麻しんの排除状態であると認定しました。その後、平成30年及び31年には海外で感染した患者を契機とした国内での感染拡大事例がありましたが、新型コロナウイルス感染症による入国制限や行動制限、感染防止対策等の影響により激減しました。しかし、新型コロナウイルス感染症の水際対策が緩和された令和5年には、年間報告数は前年より増加し、28例となりました(表)。

近年の麻しんの発生は、輸入例を端緒とするものでもあり、今後も海外からの輸入症例の増加による国内発生のリスクが高まることが予想されます。

1 感染経路

麻しんは、麻しんウイルスを原因とする疾患で、感染経路は空気感染であり、非常に感染力の強い感染症です。麻しんに対する免疫を持たない場合、麻しん患者と接触する機会があった際には、ほぼ100%感染するとされています。

2 症状及び経過

麻しんウイルスに感染すると、約10～12日後に発熱や熱、咳、鼻水、目の充血などのカタル症状が現れます。2～4日間熱が続いた後、一旦解熱し、頬の粘膜に特徴的な「コプリック斑(白い斑点)」が見られるようになります(写真1)。その後、再び39℃以上の二峰性の発熱とともに特有の発疹が出現します(写真2)。

全身の免疫力が低下するため、肺炎、中耳炎などを合併することがあり、まれに予後不良の脳炎(亜急性硬化性全脳炎)を発症し死に至ることもあります。

合併症がなければ、主な症状は7～10日で回復しますが、免疫力の回復には1か月程度を要するため、それまでは他の感染症にかからないよう十分な注意が必要になります。

3 治療及び予防方法

麻しんに対する治療法はなく、症状に応じた対症療法が行われます。

麻しんは、空気感染するため、手洗いやマスクのみでは予防できません。そのため、ワクチンによる予防が最も重要になります。京都府では、十分な免疫をつけるため、麻しん風しん混合ワクチン(MRワクチン)について、就学までに2回の定期接種を実施しています。

<定期接種対象者>

- ・第1期:生後12か月以上24か月未満の者
- ・第2期:5歳以上7歳未満の者であって、小学校入学前の1年間

上記に該当する方は、無料でワクチンの接種が受けられます。

該当年齢の方で、まだワクチンの接種を受けていない方は、速やかに受けましょう。

(該当年齢を外れると有料となります。)

4 法的位置づけについて

感染症法により5類全数把握感染症に規定されています。麻しんを診断(臨床診断例を含む)した医師は、直ちに届け出ることが義務付けられています。

また、学校保健安全法により第2種学校感染症に規定されていますので、登校の可否は学校の指示に従ってください。

○京都市情報館「京都市内で麻しん(はしか)が発生しました」(広報資料)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000323904.html>

表. 国内の感染者数の推移(2024年3月13日現在)

年	全国(人)	京都市(人)
平成20年	11,015	106
21年	147	4
22年	447	2
23年	439	0
24年	283	1
25年	229	3
26年	462	4
27年	35	0
28年	165	2
29年	186	1
30年	279	1
31年/令和元年	744	2
2年	10	0
3年	6	0
4年	6	0
5年	28	0
6年(～10W)	11	1



写真1. 口腔内にみられるコプリック斑(※)



写真2. 発疹の写真(※)

(※) 厚生労働省「学校における麻しん対策ガイドライン」より。